

## —竹田恒泰氏を迎えての— 夏季教化研修会



8月29日、砥鹿神社を会場として夏季教化研修会が開催された。本年は古事記編纂1300年の佳節にあたる事から、「古事記の普及に向けて神社・地域での取組について」という総合テーマが掲げられ、74名が出席した。

まず午前九時半に砥鹿神社を正式参拝した後、開講式にて神社庁副庁長白井清夫氏より、「神社本庁憲章第十一条に、『神職は、古典を修め、礼式に習熟し、教養を深め、品性を陶冶して、社会の師表たるべきことを心掛けなければならない』とある。また元神社本庁統理細川護貞氏も、古典を勉強しなさい、常識を持ちなさい、と仰っていた。古事記編纂千三百年を迎え、本日の研修で学んだ成果を、それぞれの支部や神社で発揮して欲しい」と挨拶が述べられた。



次いで慶應義塾大学講師の竹田恒泰氏を講師に迎え、「古事記からみる皇統の歴史を考える」と題する講演に移った。

氏は大きく分けて3点について述べられた。

### 【建国の経緯とその精神】

これについて、戦後の歴史教育では教えられておらず、日本人の誇りとしてきた神話が、GHQにより封印された事を指摘、そして、民族の価値観を形成するものとして、自然観・死生観・歴史観の三つの柱があるが、日本人はそのいずれもが独特であり、国際人となる為には、他国の事よりもまず自国の事を学び、堂々と説明できるようになる事が大切であること。

### 【古事記 1300 年の持つ意味】

昨年の震災以降、日本の事をもう一度見直そう、底力を取り戻そうという機運が高まっている中、古事記編纂千三百年の年を迎えるのは、神様からのメッセージがあるのではないかとし、神職各位が問題意識をしっかりと持ち、来年の神宮の御遷宮にむけて一人でも多くの方と御縁をつなげていただきたいと開陳した。また、古事記は皇室にとって都合良く書かれたフィクションとする評価も以前は存していたが、近年の考古学研究の成果から、かなりの部分が事実である事が分かってきた事を説明した。そして、神武天皇が137歳まで生きていたという記述から、神武天皇の存在そのものを否定する説に対して疑問を投げかけ、キリストもブッダも、奇跡的な出生をしているが、誰も存在自体までも否定をしてはいない事から、古典には様々な伝承も含まれてきた事を考慮し、それらが混ざっていたとしても、記事全体を否定した解釈をする事は危険であると力説した。

### 【皇位継承問題】

女系天皇支持者が皇祖神をアマテラスオオミカミとし、且つ皇孫アメノオシホミニノミコトを産んだ存在である事を支持論拠としている点について反論。まず大日本帝国憲法と教育勅語の「皇祖」「皇宗」は、起草者である井上毅自身が、それぞれ神武天皇、歴代天皇を意味していると明言している事から、万世一系の皇室はアマテラスオオミカミからではなく、神武天皇から始まるとするのが本筋であり、アマテラスオオミカミは数ある皇祖神の中の一柱である点、加えて、皇孫アメノオシホミニノミコトは、アマテラスオオミカミとスサノオノミコトの二柱の神が誓約を行った時に生まれた神であり、決してアマテラスオオミカミ一柱から産まれてはいない点等から、これらの論拠は神話解釈が不適切であるとし、男系天皇支持の主張がなされて締め括られた。



午後からは、神社庁教化常任委員中村和彦氏より、昨年11月10日・11日の両日、神社本庁にて開催された全国教化会議の報告があり、席上、中村氏の奉務先の老津神社にて神社振興対策教化モデル神社事業として平成19年に行われた、地鎮祭から新穀献納までの献穀事業を記録したDVDも上映された。

その後参加者は9班に分かれ、「神宮大麻増頒布に向けて」と題するグループ討議を行った。各班の発表者からは、本年が神宮大麻全国頒布百四十周年の年でもあり、今後増頒布を推し進めるためには、広報や頒布組織の更なる充実が必要である等々の意見が出、本研修が各神職にとって、改めて神宮大麻頒布に対する現状と対策とを考えるよい機会となった。

その後閉講式となり受講者代表に修了証が手渡され、教化常任委員長三浦正典氏より挨拶が述べられて終了となった。